第２章　広域観光連携の意義と目指すべき方向

２－１．北陸圏及び隣接県における「広域観光連携」の必要性・意義と目指すべき方向

（１）広域観光連携の必要性・意義

観光立国推進基本計画では、地域の魅力ある観光資源を広域的にネットワーク化する広域連携による観光振興促進の重要性が示され、国民１人当たりの年間の宿泊数を増やすことが基本的な目標の１つに掲げられている。

広域観光連携の推進とは、これまでの「１つの観光地を訪れる観光」から「１つないしは２つの観光エリアでじっくり滞在する観光」もしくは「複数の観光エリアを訪れる観光」への転換を目指すものと位置づける。

その必要性・意義を次の３点から整理した。

広域観光連携の必要性・意義

①観光客の行動範囲の拡大に対応した広域的な取り組みの必要性

2 泊以上の旅行日程の場合、一つの観光地だけで観光客を満足させることはなかなか難しい。特に外国人観光客については、旅行日程が長いことから、特にその傾向が強い。また観光客のニーズは一層多様化してきている。

こうした旅行者の行動範囲の拡大や旅行ニーズの多様化に応じて、広域的に観光地を回す必然性が生じている。

そうした点から、旅行者の行動範囲にふさわしい、広域的に整合性のある観光行政、観光施策の展開が必要といえる。

②地域間競争に打ち勝ち目的地として選択されるための訴求力強化が可能

国内外での観光地間競争が激化するなか、観光地間・観光エリア間の連携により観光資源を相互に結びつけることで、個々の資源の魅力を相乗させ増強させることができる。

③圏域内への経済波及効果を高めることが可能

観光立国推進基本計画では、国民の年平均泊数を H18 年度 2.77 泊/年から H22 年度：４泊/年とすることを目標としている。こうした方向性をふまえ、広域観光推進を通じて圏域内での滞在時間を増やすことは、地域全体の経済波及効果を高めることに繋がる。

これまであまり知名度の高くなかった潜在力のある観光地を、知名度の高い観光地と併せて広域の周遊ルートに組み込むことにより、知名度向上に資することが期待でき、その結果として当該地域の地域活性化につなげることができる。

（2）目指すべき方向

今回の対象地域である6県を１つの圏域として捉えた場合、これからは、先ず圏域へ入り込む線（来訪者）を太くし、それを圏域内でできるだけ長く回遊してもらい、圏域内での滞在時間を増やすという構図を確立することが必要と考えられる。

そのためには、従来の観光地（点）単位での観光を、エリア(面)や軸(ルート)の観光にして、よりインパクトと魅力ある圏域づくりが求められる。

２－2．本調査における検討の基本的な手順

旅行者のもつ旅先（ディスティネーション）のイメージには、ある一定の範囲がある。その範囲を「観光エリア」と称したとき、観光における「広域連携」には、『①１つの観光エリア内での連携』と、『②より多くの観光エリア相互による広域連携』の大きく2つの考え方があると思われる。

本調査では、先に示した広域連携の必要性・意義をふまえ、北陸圏及び隣接県が一体となった広域連携を図っていく上での考え方以下の手順で整理・検討することとした。

□ステップ１　観光エリアの魅力向上を目指す

“個性と魅力ある観光エリアがたくさんある圏域づくり”

「隣接エリアに足を延ばしてみよう」「経路にあるエリアにも少し立ち寄ってみよう」という気にさせる魅力的な観光エリアづくりに向けた課題や視点を整理する。

⇩

□ステップ２　観光ルートの魅力向上を目指す

“より多様で魅力ある観光ルートの提供”

魅力的な観光エリアが増えるほど、既往観光ルートの魅力が高まるとともに、新たな観光ルートの可能性が生まれるという考え方に基づき、広域連携を推進する観光ルートの魅力向上に向けた課題や視点を整理する。

⇩

□ステップ３　広域連携方策を提案する

“多様で魅力的な観光ルートを実現するための方策”

既往の観光ルートの強化と新たな観光ルートの実現を可能とするための、ハード面やソフト面の方策（広域連携方策）を検討し、圏域内に多くの人が入り込み、域内で動くことにより当該圏域の地域経済の活性化を図る。

本調査における検討の基本的な考え方

第 3 章　魅力的な観光エリアの形成と観光ルートの検討

3－1．観光エリアの魅力向上

6 県が広域に観光連携していくためには、個々の観光地や観光エリア一つひとつが個性や魅力を高めることが先ず必要なことであり、そうした観光地・観光エリアを相互に結びつけることで圏域全体として相乗的な魅力を向上させることができる。

ここでは 6 県内の観光エリアについて、広域観光推進に向けた現状と課題を整理した。

（1）観光エリアの設定

旅行者が旅先を人に説明する際には、目的とする特定の観光地や宿泊地を含めたある一定の範囲を総称する。本調査では、そうした「旅行者が一般的に認識している観光旅行先の範囲」を「観光エリア」として便宜的に設定し、その範囲を基本として分析を行うこととした。

今回対象とする 6 県において、以下に示す 35 の観光エリアを設定した。

35 の観光エリア

県名（エリア数）	観光エリア名称
富山県（3）	①富山市周辺、②立山黒部、③氷見・高岡・砺波
石川県（4）	①金沢周辺、②加賀温泉郷、③白山、④能登半島
福井県（4）	①福井・坂井、②丹南、③大野・勝山、④嶺南
新潟県（10）	①新潟市、②村上・山北、③新発田、④阿賀野川、⑤三条・燕、⑥長岡・柏崎、⑦魚沼、⑧上越市、⑨糸魚川、⑩佐渡
長野県（9）	①長野周辺、②志賀・野沢温泉・飯山、③上田・軽井沢、④白馬・大町、⑤松本、⑥上高地・乗鞍、⑦諏訪・蓼科・八ヶ岳、⑧伊那・駒ヶ根・飯田、⑨木曽・中津川・恵那（木曽町、南木曽町など）
岐阜県（5）	①岐阜・各務原、②大垣・関ヶ原、③郡上八幡・美濃市、④木曽・中津川・恵那（恵那市、中津川市など）、⑤飛騨・高山

（2）観光エリアの現状と課題

北陸圏及び隣接県が魅力的な観光地として訴求力を高めるためには、１つひとつの観光エリアが官民一体となって観光地としての魅力を高めていくことが基本といえる。

ここでは､先に設定した 35 の観光エリアの現状と課題や魅力向上のための戦略について各県のヒアリング等をもとに整理するとともに、広域的視点からの各観光エリアの位置づけや課題を洗い出し、今後の広域観光推進に向けた視点を検討した。

観光エリアの位置づけ・課題整理の項目

1	観光エリアの現状と魅力向上のための課題 ①現状と課題 ②魅力向上のための戦略と主な施策
2	広域的視点からの位置づけ・課題

以下に、観光エリア毎の検討結果のうち､「広域的視点からの位置づけ・課題」について示した。

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（富山県：3 エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①富山市周辺	・県庁所在地として富山市街地の都市的機能は高い。 ・おわら風の盆など国内旅行で人気が高いものもあるが、他の観光資源の知名度を更に高める必要がある。 ・将来、新幹線駅ができることで鉄道や空路など高速交通の結節点（要衝）となる。 ・JR 高山線が、首都圏から飛騨高山エリア【岐阜】への鉄道による最短経路となる点は特筆される。
②立山黒部	・立山黒部アルペンルートが、国内外いずれにおいても観光の中心である。また、長野県とを直結する唯一のルートであるが利用料金など課題もある。 ・宇奈月温泉や黒部峡谷も人気の高い資源であるが、黒部峡谷は行き止まりであり広域的観光がしにくい。 ・糸魚川エリア［新潟県］と接しているものの、相互の行き来は少なく、異なるディスティネーションと認識されている。
③氷見・高岡・砺波	・氷見漁港や高岡・南砺の歴史文化、世界遺産の五箇山など、北陸らしさを備えた資源が豊富。 ・東海北陸道と北陸道が交差し、広域観光の要衝となる。北陸新幹線の新駅は、現在の駅とやや離れており二次交通の確保が課題。 ・能登半島エリアや金沢周辺エリア［石川］、飛騨高山エリア［岐阜］など、知名度の高いエリアと接し、相互を結ぶ通過地でもあり、立地条件が良い。

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（石川県：４エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①金沢周辺	・ 最も全国的な知名度が高く、国際観光においても看板となる北陸観光の中心的エリア、「城下町金沢の文化遺産群と文化的景観」として世界遺産登録の取り組みが進められている。 ・ 平成 26 年度には北陸新幹線が金沢まで延伸され、首都圏からの誘客が大いに期待される。 ・ 国内外のツアー旅行の多くは当エリアを訪れることから、この効果をいかに隣接エリア又は圏域全体に波及させるかが課題。 ・ 情報発信などの面でも、圏域を先導する役割を果たすべきエリアといえる。
②加賀温泉郷	・ 石川県のみならず、北陸を代表する知名度の高い温泉地が集積する宿泊拠点としての性格が強いエリア。 ・ 高速道路のほか、小松空港も近く交通アクセスは至便。北陸新幹線開業に伴う、金沢駅からの誘客。 ・ 近年の旅行形態の変化などにより入り込み客数が減少傾向にあり、顧客のニーズを捉えたきめ細かなサービスや街づくり等の環境整備など一層の魅力向上が期待される。
③白山	・ 白山麗の自然と文化やレクリエーションエリアとして個々の資源の魅力は高い。「霊峰白山と山麓の文化的景観」として世界遺産登録の取り組みが進められている。 ・ 中でも、飛騨高山エリア［岐阜］を結ぶ白山スーパー林道は、春夏秋と季節の自然を楽しめるコースとして人気があり、７月の東海北陸道全線開通により、金沢－高山の周遊の利便性が大きく向上する。 ・ 環白山広域観光推進協議会が組織されモデルコースの設定・売り出しやホームページの運営など共同でＰＲが行われている。
④能登半島	・ 豊かな自然と輪島塗などの伝統工芸など豊富な地域の資源を活かした観光が積極的に展開されている。・和倉温泉や輪島など、宿泊拠点も有しており、何日か滞在しても飽きのこない十分な観光資源がある。 ・ 能登空港整備後、インバウンド観光が促進され、能登 in の台湾チャータ便による訪日旅行のゲートウエイとなっている。 ・ 元々国内観光の知名度があり、能越道の整備によって、氷見高岡砺波エリア［富山］とのアクセスが強化され、広域観光周遊の可能性が一層広がる地域である。

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（福井県：3 エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①福井・坂井	・ あわら温泉は北陸を代表する知名度の高い温泉地であり宿泊拠点となる。 ・ 永平寺は国内観光で根強い人気。 ・ 北陸新幹線は現状で金沢までの整備であること、小松空港が最寄りの空路であることなど、石川県内エリアとの関係強化が課題 ・ 首都圏との関係においては、東海道経由と時間距離に大差はない。。
②丹南	・ 広域周遊観光面では、求心力のある資源に乏しいものの、越前陶芸村は体験型観光施設として訪日外国人旅行でも紹介されている。 ・ 関西や中部からの周遊観光の通過点にならないための工夫が求められる。
③大野・勝山	・ 九頭竜狭など、国内観光で根強い人気。また恐竜博物館は、北陸内では異色の存在として広域観光の訪問地（ターゲット）として認知されつつある。 ・ 郡上八幡エリア［岐阜］を結ぶルートは、広域観光において重要なルートといえ、高規格道路の整備も予定。
④嶺南	・ 福井県のなかでも最も関西寄りに位置し、首都圏からの周遊がしづらいエリアの１つ。 ・ 三方五湖や氣比の松原などの既往資源のほか、「原発」も産業観光のテーマになりうる。 ・ 舞鶴若狭道の整備により関西や山陰を含めた広域ルートの可能性が期待される。 ・ 集客力のある温泉地が存在しないものの、民宿主体の宿泊サービスは他エリアには無い特徴を出すことができる。

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（新潟県：10 エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①新潟市	・ 合併後は政令市として周辺の地域経済を一層牽引している。また市街地では、サミットやＪリーグなど、大規模なイベント・催しが開催される。 ・ 市街地内では都市型観光が中心、河川周辺や郊外(農村)では農や自然を生かした観光まちづくりが進められている。 ・ 新幹線を始め、新潟空港や佐渡及び北海道航路などの拠点であるが、2014 年問題や新潟空港の利用促進など対応すべき課題もある。
②村上・山北	・ 瀬波温泉が観光の中心であったが、近年では村上市街の町歩きが全国的に注目されている。笹川流れなど海沿いの景勝地は、他県での知名度は十分といえない。 ・ JR きらきら羽越号など、広域観光連携の対象は鶴岡市・酒田市など東北側となる。 ・ 日沿道は朝日 IC までの供用が予定されており、高速交通アクセスの環境改善が期待されている。
③新発田	・ 新発田市は城下町として名高く、町中に歴史・文化的資源があるものの、十分に活用されていない。 ・ 月岡温泉は国内外から多くの観光客が訪れている。新潟空港利用のインバウンド旅行客の泊地として利用されている。
④阿賀野川	・ 狐の嫁入り（阿賀町）など、個性的なイベントが知られているが、全国クラスの知名度は無い。 ・ 特に磐越道整備後は、新潟市エリアと福島県側（会津若松等）の結びつきが強くなり、既に当該エリアは新潟～福島間の通過地点として素通りするケースが多い。
⑤三条・燕	・ 三条・燕の特性である「ものづくり」を産業観光に活かし他エリアに無い個性を演出することが望ましい ・ 弥彦神社は、どちらかと言えば国内においては域内観光向けの資源だが、海外向けには周辺の酒蔵や魚市場どおり等と併せて定番コースとなっている。 ・ 新幹線駅や高速 IC による高速交通体系の利便は高い。
⑥長岡・柏崎	・ 新幹線駅を有し、高速道路も北陸道と関越道の JCT があるなど、高速交通体系が充実するエリア。 ・ 越後三大花火大会はすべて当エリア内で開催される。知名度の高いイベントは大きな連携要素となることから、他エリアの夏祭りとの連携や他の資源との組み合わせたルート提案が課題。 ・ 北陸新幹線開業による観光客の減少が懸念されており、主に首都圏を対象とした誘客推進のための取り組みが喫緊の課題といえる。
⑦魚沼	・ 越後湯沢や苗場のイメージは、スキーや温泉であったが、高原観光やイベント(FUJI ROCK)が開催されるなど、通年に渡った観光に取り組んでいる。 ・ 北陸方面へアクセスするほくほく線との乗換駅となる。将来、北陸新幹線開通による課題は問題となっている。 ・ 大地の芸術祭（十日町市）は、首都圏など広域観光の誘客可能なイベント。 ・ ほくほく線や上越新幹線など、北陸新幹線開業による観光客の減少が懸念されており、主に首都圏を対象とした誘客推進のための取り組みが喫緊の課題といえる。
⑧上越市	・ 北陸道と上信越道の分岐にあたり交通の利便は高い。長野県側とのアクセスが良く、県内他エリアよりも関係は深い。 ・ 直江津港を発着地とする佐渡エリアを結ぶ航路がある。 ・ 妙高は高原リゾート型観光地としてディスティネーションは長野エリアと一体。また、雪や温泉など個々の資源の質の評価は高く、豪州からのスキー客誘致に長野と連携して取り組んでいる。 ・ 北陸新幹線の新駅は、既存市街地から離れた位置となるが、周遊観光の面ではメリット有り。 ・ 北陸新幹線開業に伴い上越駅等からの二次交通整備が課題
⑨糸魚川	・ 親不知・子不知や翡翠などの資源があるが、観光エリアとしての体力は他に比べ弱い。 ・ 広域周遊観光の場合、上越エリアと立山黒部エリア[富山]の間にあって観光客は通過するケースが多い。 ・ 白馬大町エリアとの結びつきがあるものの、高速交通網整備の計画もあるが現状で物理的なつながりは弱い。
⑩佐渡	・ 全国的な知名度は高く、国内外旅行の人気も少なくない。 ・ 佐渡金山、朱鷺、たらい舟など観光資源も豊富。 ・ 離島であるがゆえに、船もしくは飛行機でのみアクセス可能。特に冬期は悪天候による欠航が不定期に生じる。また料金も割高感がある。 ・ 年に１回開催のアースセレブレーションは、訪日外国人に人気。 ・ 外客 FIT 向けの二次交通、ガイド、フェリーへの荷物運搬が課題

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（長野県：９エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①長野周辺	・ 善光寺は全国的な知名度も高い観光資源である。冬季オリンピック開催地として、海外の知名度も高い。 ・ 新幹線や高速道路など高速交通の利便が良い。長野市周辺や白馬・野沢温泉、志賀高原、妙高高原エリアなどに多くの温泉地やスキーエリアがあり、成田 in の訪日旅行者の交通拠点となっている。
②志賀・野沢温泉・飯山	・ 北陸新幹線開業に伴い、飯山駅を拠点とした誘客促進が課題となる。 ・ JR 飯山線でつながる新潟県魚沼地域や、妙高を中心とした新潟県上越エリアとの広域連携
③上田・軽井沢	・ 軽井沢は全国的な知名度も高く、国内（特に首都圏）を中心に多くの集客がある。 ・ 新幹線や上信越道など高速交通の利便も良い。 ・ 周遊ルートとしては、草津温泉など群馬県との関係も強いエリアである。
④白馬・大町	・ 白馬や八方尾根スキーエリアは、冬季オリンピック開催地として海外の知名度も高い。 ・ 近年の VJC 等の誘客効果により、豪州を中心とした欧米のスキー旅行者が急増している。 ・ 訪日スキー客は長期滞在するが現在のところ行動範囲はエリア内に留まっているが他エリアへ広がる動きも見せている。
⑤松本	・ 松本城をはじめとした都市観光は、国内外の知名度が高く、広域観光の拠点となる。 ・ 北陸新幹線のルートから外れているものの、長野エリア、飛騨高山エリア、木曽エリアなど広域周遊ルートの要衝となる。 ・ 金沢市や高山市との観光協定等による広域連携の強化
⑥上高地・乗鞍	・ 北アルプスを中心とした山岳・自然観光の中心地として、知名度が高い。 ・ 松本と飛騨高山の知名度が高いエリア間にあり広域周遊ルートとして質が高い区間。また、当該ルートは、首都圏と北陸を結ぶルートとして知られ、中部縦貫道整備による効果が期待される。
⑦諏訪・蓼科・八ヶ岳	・ 長野県のなかでも、高原観光の拠点の１つとして知られ、国内外旅行者の人気も高い。 ・ 白樺湖周辺は、訪日外国人ツアーの宿泊拠点となっている。
⑧伊那・駒ヶ根・飯田	・ 中山道の繋がりで隣接する岐阜県側エリアと一体となり街道観光の特徴を有する。 ・ 長野県内にあって、JR 東海エリアに属している。
⑨木曽・中津川・恵那（木曽町、南木曽町など）	・ 中央高速道ルート上にあって中部～首都圏を周遊する訪日旅行の通過路となっている。 ・ 長野県内にあって、JR 東海エリアに属している。

各観光エリアの広域的視点からの位置づけ・課題（岐阜県：５エリア）

観光エリア	広域的視点からの位置づけ・課題
①岐阜・各務原	・ 金華山や長良川の鵜飼いなど、知名度の高い資源を有するが、愛知県に至近で北陸から遠隔地にあるため、北陸を中心とした周遊観光の訪問地としてイメージしにくい。
②大垣・関ヶ原	・ 岐阜エリアと同様に、愛知県に至近で北陸から遠隔地にあるため、北陸を中心とした周遊観光の訪問地としてイメージしにくい。
③郡上八幡・美濃市	・ 国内においても「郡上八幡」という地名の知名度は高い。・東海北陸道沿線にあり、主に自動車による中部圏からの北陸旅行の経路上にあたる。また、永平寺勝山大野エリア［福井］と接し、岐阜から福井へ入るルートの分岐点でもある。 ・ 愛知県から比較的近い位置にあるため、北陸の周遊旅行では通過されやすい。
④木曽・中津川・恵那（恵那市、中津川市など）	・ 中央道ルート上にあって、長野県エリアとの周遊観光の関係が深いエリア。中部～首都圏を周遊する訪日旅行の訪問地となっている。 ・ 隣接する木曽・飯田エリア［長野］と一体として、街道観光の特徴を有する。
⑤飛騨・高山	・ 高山の街並みや白川郷、下呂温泉など、全国的に知名度の高い観光資源を有し、金沢等と並んで国際観光の看板となるエリア。 ・ 地理的に、北陸三県と長野県を結ぶ広域周遊観光の要として欠かせないエリアといえる。 ・ 東海北陸道のほか、中部縦貫道整備が一層その役割を高めるものと思われる。

（3）観光エリアの魅力向上と広域観光連携の視点

1) 観光エリアの魅力向上

各観光エリアの課題整理をふまえ、広域観光連携推進に向け、観光エリアの魅力向上のための視点を以下に考察した。

（新たな観光形態への取り組み）

- 殆どの観光エリアで、それぞれの地域資源を活かした体験型観光プログラムづくりが課題として挙げられている。
- そうした取り組みを目指している地域では、「リピーターの確保」や「本物志向への対応」などの目標が共通して掲げられている。

＜主な事例＞

> ○アルミ・銅器・漆器等の地域産業を見学する産業観光（氷見・高岡・砺波）
> ○トレッキングなど白山の豊かな自然を活用したエコ・ツーリズム（白山）
> ○オーナー水仙畑などグリーン・ツーリズム（丹南）
> ○海里山の連携によるブルー＆グリーン・ツーリズム（長岡・柏崎）
> ○農家民泊、農業漁業体験など（能登ほか多数）

（まちなか散策・街並み鑑賞・歩きの観光）

- 金沢や高岡、小浜、高山、木曽など、多くの観光エリアにおいて、まちなかや旧街道を歩いて巡る観光を推進するエリアが数多く存在する。
- そうしたエリアに共通する課題として挙げられているのは、域内公共交通の充実や案内機能の強化、観光ボランティア育成などである。

（温泉観光地の活性化）

- 加賀温泉郷やあわら温泉、宇奈月温泉など、古くから有名な温泉地の多くで、「活性化」をキーワードとして、旅館などの宿泊施設再生だけでなく、温泉地全体の演出など様々な取り組みが提案されている。
- また近年のニーズに対応して、「個人や少人数のグループ」を対象とした施設改善などが取り組まれている。

（全国的又は大規模イベント、キャンペーンの活用）

- 国内のみならず国外からも一定規模の集客が見込める祭りやイベントを活用した観光推進を図っている例も見られる。

＜特徴的なイベント例＞

> ○利賀芸術公園の国際的な舞台芸術の活用（氷見・高岡・砺波）
> ○サイトウ・キネン・フェスティバル（松本）
> ○アースセレブレーション（佐渡）
> ○2009 新潟県大観光交流年

（広域交通拠点を核とした公共交通網整備）

- 新幹線や高規格道路の整備充実によるインパクトは、広域での誘客促進を図っていくための「きっかけ」として、大きな期待がかけられている。
- そうしたインフラが自地域内に整備されている観光エリアでは、より「広域観光」に対する意識が強い傾向がみられる。
- 一方で、そうしたインフラの整備・充実によってストロー効果等のマイナスの影響を受けるおそれのある地域等では、「通過型」から「滞在型」に向けた対応がより大きな課題として位置づけられる傾向がみられる。

（広域交通拠点を核とした公共交通網整備）

- 富山や高岡、金沢などの北陸新幹線駅や富山・能登・小松などの空港が、広域的な観光・交流の拠点として位置づけられており、そうした玄関口における交通結節機能が課題としてあげられている。
- これにあわせて、並行する在来線のほか、地方鉄道、バスなど地域交通ネットワーク等の充実による二次交通環境整備も必要な取り組みとして位置づけられている。

観光エリアの魅力向上には、１つの観光エリア自体が魅力を高める「観光エリア内での連携」とともに、複数の観光エリアでの相互連携の２つの対応があると考えられる。

上記の要点をもとに、今後の観光エリアの魅力向上に向けた視点を以下に整理した。

広域観光連携の推進に向けた観光エリアの魅力向上の視点

■観光エリア内での連携

○エリア内もしくは隣接エリアにおいて大きな集客の見込める観光地や祭り・イベントをきっかけにして、より多くの来訪者を誘導する仕掛け

○観光エリア内の未だ知られていない固有の観光資源や体験型観光を積極的に組み合わせた新たな観光の推進

○ニーズに応じて新たな取り組みを展開している観光地においては、観光エリアが一体となり効果的かつ多様な PR 活動による「旧来型観光地」のイメージの解消

■複数の観光エリアでの相互連携

○より広域的な観光を促す共通のテーマやストーリーによる連携関係さがし

○新幹線や高速道路の高速交通体系の積極的な活用と、新幹線駅など新たな広域交通の拠点性を高め、観光エリア相互を円滑に回遊できる環境づくり

○共通のテーマをもつ観光エリア同士の連携による新たなディスティネーションイメージの植え付けと来訪意欲の喚起

2) 観光エリアをつなぐ「テーマ・ストーリー」

観光エリアの魅力を高める１つの考え方として、「複数の観光エリアの相互連携」という視点が考えられることは先に述べた。

ニーズが多様化する現在では、これまでの物見遊山的な周遊旅行よりも、あるテーマ・ストーリーをもった旅行を行うスタイルが一般的といえる。発地や国内・訪日旅行の別にかかわらず、近年は有名観光地を巡る周遊旅行だけでなく、「特定のテーマ・ストーリー」を掲げた商品も数多く販売されている。

北陸圏（3 県）に隣接県を加えた 6 県を１つの圏域として捉えたとき、旅行者が選択できる観光の種類は多種多様であるが、共通するテーマ・ストーリーで複数の観光エリアが連携し発信することで、当圏域ならではのより深い、特色ある旅を提供することができる。その「テーマ・ストーリー」の積み重ねが当該圏域全体の魅力を高めていくことにつながるものと考えられる。

圏域の個性や特色を出すことができる主なテーマ・ストーリーと観光資源

主なテーマ・ストーリー	主な組み合わせの対象となる観光資源
温　泉	宇奈月温泉（立山黒部）、加賀温泉郷、和倉温泉（能登）、あわら温泉（福井・坂井）、　湯田中渋温泉郷・野沢温泉（志賀・野沢温泉・飯山）、上諏訪温泉（諏訪・蓼科・八ヶ岳）、白骨温泉（上高地・乗鞍）、湯沢地区温泉（魚沼）、下呂温泉・奥飛騨温泉郷（飛騨・高山）など多数
食	海の幸、山の幸、米、酒、高原野菜、果物、和菓子（城下町）、など多数
雪	新潟・長野をはじめとしたスキー場、海・里・山（アルプスなど）の雪景色、立山黒部アルペンルート（雪の大谷）、雪祭り、雪国の生活文化、など
祭　り	おわら風の盆（富山）、こきりこ祭り（氷見高岡砺波）、キリコ祭り（能登）、三国祭り（福井）、お水送り（福井）、長岡花火等（長岡・柏崎）、大地の芸術祭（魚沼）、アースセレブレーション（佐渡）、高山祭り（飛騨高山）、諏訪御柱祭（諏訪）、長良川鵜飼い　など
古い街並み・歴史・街道文化	金沢、越中八尾、井波、城端、山中温泉、越前大野、熊川宿、村上、出雲崎、須坂、上田、松本、上諏訪、奈良井、馬籠、飛騨古川、高山、白川郷、郡上八幡、美濃、多治見　など
匠・伝統の技	金箔工芸（金沢）、和紙（五箇山など）、陶芸（九谷焼、美濃焼他）・越前陶芸村、ガラス工房、漆器（越前、輪島、山中、木曽、村上等）、越前竹人形の里、富山民俗民芸村　など
文化、芸術・アート	若狭～高岡の万葉文化、佐渡の能文化、金沢百万石城下町文化、北前船文化、21 世紀美術館（金沢）、大地の芸術祭、文学（室生犀星、泉鏡花、、坂口安吾、島崎藤村）など
風景・絶景	農山村の風景（里山、棚田、農村平野、散居村、合掌造り集落など）や海辺の漁村・湊町など「ふるさと」を感じさせる原風景 東尋坊、千里浜、三方五湖、黒部ダム、雨晴海岸、山岳（アルプス、白山ほか）、親不知、佐渡海岸など、自然地形による絶景
太古の歴史	県立恐竜博物館・白山恐竜パーク白峰（福井）、魚津埋没林博物館、新潟歴史博物館（縄文土器）、野尻湖遺跡（長野）　など
歴史的建造物等	兼六園、松本城、黒部ダム、寺社仏閣（永平寺、善光寺、瑞龍寺など）、世界遺産（合掌造り集落等）　など
産業観光	YKK アルミファスナー産業（黒部）、眼鏡産業（福井）、原子力技術（若狭、柏崎）、金属産業（三条・燕）、セラミック産業（岐阜）　など

3) 広域連携による魅力向上の視点からみた主な観光エリアの位置づけ

- 広域観光連携が推進する将来の姿は、北陸圏及び隣接三県にある全ての観光エリアが多種多様に「連携」していることが理想といえるが、各観光エリアの有する観光資源や地理的特性、交通環境などの特性から、知名度や利便性といった点で「連携相手としての魅力」に偏りがあることも否定できない。
- また、具体的にどのような連携関係をつくることができるのか、他の観光エリアの未だ知られていない資源や価値の存在を知る手だてが少ないという点も課題といえる。
- そうした点では、各観光エリアが「魅力的な連携相手」として認知されるよう、他のエリアに頼ることなく各観光エリア一つひとつが常に磨きをかける姿勢をもつことは、必要不可欠なことと考えられる。
- また、連携するための共通テーマ・ストーリーを見いだすため、相互に情報を発信共有する環境づくりも必要といえる。
- 一方で、当該エリア内により多くの来訪者を呼び込むという観点からは、各種マーケットや旅行会社（エージェント）等に対して圏域全体の広域連携による魅力を戦略的かつ効果的に売り込んでいく必要があると考えられる。
- なお、既に本調査の対象地域（6 県）では、観光エリア間で具体的に進んでいる連携関係も多数存在しており、広域観光推進協議会等を中心としたこうした取り組みは今後とも積極的に展開されるべきものと考える。

以上の点をふまえ、今後、当該エリアにおいて広域観光連携を推進していくうえで特に担うべき役割があると考えられる観光エリアについて、その「位置づけと今後の留意点」を次図の通り整理した。

広域的視点からみた主な観光エリアの位置づけと留意点

